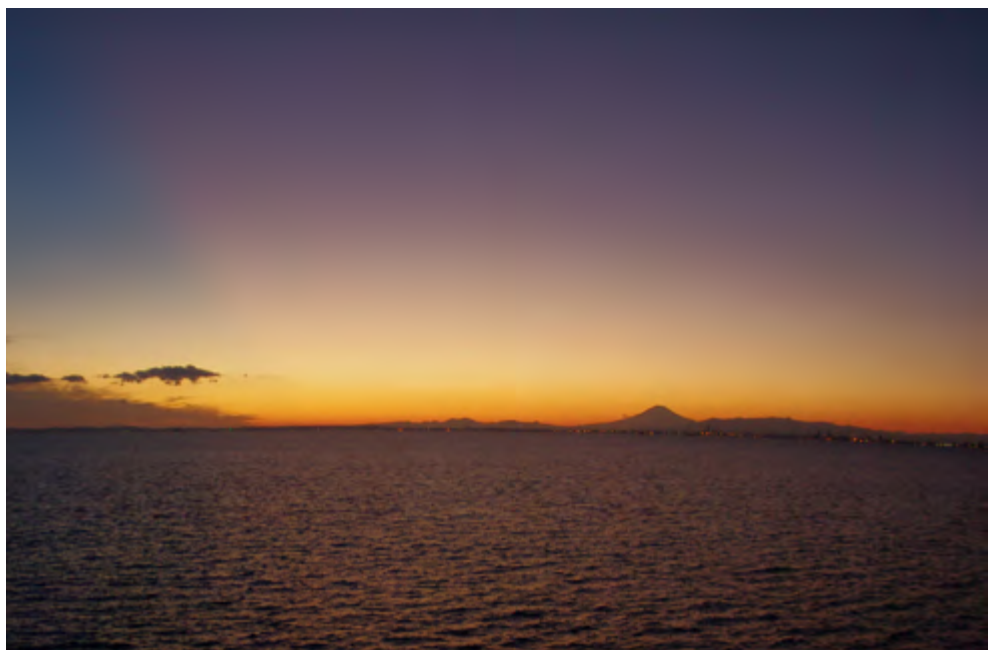


あそ

1

2014



海ほたるより

遠きミャンマー



公や指が大地を歩く時暁夏かな

佐藤喜孝

あそ

一月



寶舟 佐藤喜孝

夕ぐれの濡れてつめたき白筵

餅搗の裏の焚口いつか昏れ

あたたかき足袋はいて立つお元日

舊作を寝押ししてゐる去年今年

あかんぼのゆすられてゐる寶舟

お正月道へ出てくる柔道着

數の子や今は無くとも古寫眞

いま寝てゐる部屋には時計を置いてゐない。窓は北側をのぞき三方にあるが雨戸はない。ので厚いカーテンを引いてある。目を覚すと何時だか分らぬので耳を澄ます。明け方であれば鴉が啼いてくれる。聞えぬ時は手を伸すととどく西窓のカーテンの隙間から様子をうかがふ。大概はまだ真つ暗である俳句ノートを整理してゐて飽きるとまだ窓の色を伺ふ。podをとりだし無料の産経新聞朝刊をとばし読みする。そのうち横になつてゐるのに飽きが来る。一階に下りる。少し明るんできたのに鴉が啼かないなーと思ひつつパソコンのスイッチを入れる。ネットの「俳誌のsoco」の歳時記のコーナーを書換えてる。毎日一つづつ季語を増やしてゐるので、だんだん時間がかかるやうになつてきた。速くて一時間弱、かかつてしまふと二時間かけても終わらない。二時間ほどパソコンの前に坐つてゐると目が疲れてくる。

朝食前のわたしの生活パターンである。落ちのない話でござん。

雪吊り

木村茂登子

木道の見ゆるかぎりの草紅葉

立冬の空へ見送るハワイ便

青天を突く木守柿紅一点

枯野ゆく汽笛にゆらぐ旅心

雪吊りや猿のごとき人の影

たよりなきおもひどこかに暮の秋

冬空のさみしさに棲む昼の月

☆

齊藤裕子

夫の背に指でありがとう冬ぬくし

さりげなく優しき夫子冬ぬくし

冗談に労り満ちて冬ぬくし

栗色のウィッグで安らぐ小春かな

激励の句誌が届くや十二月

手折り来てゆかし香満つる黄の小菊

山茶花のふうりはり包む黄蘗かな

車椅子に乗る経験をした。

総持寺の六泊行事の最終日、喘息が発症し息づかいを心配した周囲の配慮で車椅子を勧められた。

控室から会場まで歩数にして三百歩程の建屋内の移動であったが断り切れず勧めに従った。途中段差の所では若い僧が三人がかりで丁寧にあつてくださった。自分ではさほど苦しく思っていなかったので車椅子と聞いた時は仰天するほど驚いて拒んだが厳粛な会場で咳き込んでしまったら大変との配慮でもあったか、と後になって気付く自分の愚かさを恥じた。

事の起こりは婦人会の仲間と、たまたま宿泊所の荷物置場で隣り合わせになった大分県から参会の看護師さんが相談してお寺に交渉して下さったとのことで、決め手は看護師

(29頁に続く)

入院して一回目の抗癌剤治療を終え、現在は通院で週一回の抗癌剤投与を続けている。体のだるさや、投与後数日間の気持ち悪さはあるが、今の処、中断する事なく治療を受けられている。白血球の数とのにらめっこが続く。

病気との闘いは、自分の気持ちとの闘いである。副作用で薄くなった髪。末の息子が「薬が効いている証拠でしょ。お母さんのはまた生えてくるからいいよ。俺なんか抜けたらもう生えてこないんじゃないかと怖くなるよ。」と笑わせてくれる。気持ちが楽になる。髪を染めたことのない私が、栗色のウィッグを買った。息子達に好評だ。揺れる気持ちを、夫と息子達が支えてくれる。毎日、感謝の気持ちでいっぱいになる。

枯 蓮

篠田純子

神社在る処ぼっかり小春空

ゆふぐれの線はすぐそこ冬の鷺

蓮枯るるフランスパンの穴ばかり

枯蓮あを鷺ひとりでに暮るる

午後四時にぱつと始まるクリスマス

愚痴数多染み込んでゐるマスク捨つ

蔦紅葉血は立ったまま立ったまま

雷おこし

定梶じょう

雁一縷帰る洋上時化つつあり

遠ければ列車親しき刈田かな

噛んでけり京の豆菓子冬に入る

雨そぼつあの蓑虫のどうしたらう

無辜われら困ふ焚火の竹が爆ず

ミントガム噛めばかりくて冬めける

一葉忌雷おこし割るにちから

五十年程前、中・高一貫で学んだ。先生のアダ名は、先輩から代々受け継がれる。前歯の大きい数学の先生は「錆びチャック」。口を閉じても閉しても自然に開いてしまっから。「ボチ」という先生は、本当に犬顔だった。「中央線」は、髪を真中分けにしている分け目の真直な現代国語の先生だ。「中央線」がある言葉の意味をたずねた。私は辞書を引いて答えると、こう言った。

「君は辞書に書いてある通りに言っているだけだ。辞書を引いて理解したら、考えて自分の言葉にして答えるように。」と又、文学は胸に溢れてきたものが、喉元まで上がってきた収まり切れなくなるまで待つ。そして文章にして吐き出すのだ、とも言っていた。「中央線」は作家を指していたのだろうか。本名は忘れた。

妹のがり行く辺ゆふぐれ落穂拾ふ
とほる

この句には少し説明が必要で、とほるさんの奥様がある病いにかかられ、入所する施設に子供さんらと通われた、そんな折りの句なのだ。で、所属する俳誌に投句。活字になった時「妹がりの」として掲載されていた。

あゝ誤植だな、ととほるさんは思ったそうだが、巻末近くの直した句採れなかった句の欄に、「妹のがり」はいかにもおかしい、それで添削した、とあったという。

こういう俳句の先生は自分の知識に絶対の自信を持っているのだらう、辞書にあたるということをしななのだ。「今は、妹がりの、ともいうからな」とはとほるさんの言だが。

☆

須賀敏子

水鳥の二羽の細波秋惜しむ

団栗を山盛にして栗鼠の墓

百年の枝にたわわの柚子を挽ぐ

冬の雲東京タワーでゆるゆると

小六月東京タワーでまず富士を

小春日の東京タワー富士浮かぶ

冬晴るる幟新しデモの行く

☆

竹内弘子

御下問のありし新米かと思ふ

猫とんで冬の風鈴すこし鳴る

雑踏に見失ひたる冬帽子

湯の流るごとき荒川冬の靄

冬の雁ひとにしたしき歩きぐせ

既にして蝕まれゐる冬の月

しぐるるや木々の月日に添ふくらし

冬晴れの十一月三十日「特定秘密保護法」反対のデモ行進に参加した。所沢市の旧町地区を一時間ほど歩いた。青く澄んだ空を見上げながら、この漠とした不安感はどこから来るのだろうかと考えていた。

私に残された時間は僅かであるが、十歳と六歳になる孫たちを思う時、日本は民主主義の国・思想・信条・言論・表現の自由を保障される国であって欲しい。昔の日本には決して戻ってはならない。そんな気持で「特定秘密保護法案」には反対の表明をした。



立 冬

田中藤穂

陽だまりのやうな人逝き霜月来

凧一号木枯さんの笑顔見ゆ

立冬や雨戸の溝に蟬をひく

右肘に覚えなき傷冬の月

ポケットに去年の木の実冬の星

閻魔より奪衣婆恐し紅葉寺

栗をむく越路吹雪を聴きながら

冬 満 月

長崎桂子

秋風や降る度松は色増して

ひそやかに草紅葉して愛しかな

川に散り紅ちりばめる山紅葉

坂越えて薄日さし来し帰り花

上衣ぬぎ駆けて行く児等小六月

月参り夕暮うれし冬満月

夕餉煮る匂ひただよふ冬満月

水芙蓉の花が終ったので枝を伐らねばならない。今までは私が、鋸で何日もかけて伐っていたのだけれども、今年は家の前に出来た介護サービス所に頼むことにした。そこでは保険とは別枠で、一時間二千五百円でガラス磨きでも庭掃除でもお出掛け付添いでもなんでもやってくれる。

今日。鋸や木鋏を持って来てくれて忽ちのうちに全部伐ってくれた。ゴミ袋に入れられるように枝も短かく剪って、余った時間で、道路の方へ垂れ出していた萩も根元から伐ってすっきりきれいにしてくれた。

今日は朝から暖かくて、私も伐った太枝を受けとったり気持ちよく手伝ったが、私の晩年は何だか良い方へ向っているようで、とても有難いことです。

市の行事「居るだけボランティア」に参加した日は寒波の急にやってきた日で、朝の冷え込みに驚くと同時に体がやや固くなる感じがあり、ボランティアを行う保育園に着いた。

園長先生の当園の理念は生活習慣を五歳までに身につけるののお言葉。一歳児から五歳児の各部屋を案内して戴き其の後五歳児を担当した。其の日は焼芋を作る日でさつま芋を新聞紙とアルミホイルで包み枯枝や枯葉で火を起し煙に噓せて笑聲や大声で焼きあがるまで、楽しい一時でした。

朝四歳児は「レミ」の歌を合唱して迎えてくれました。一歳児は本を開き微笑んでくれました。縄跳では縄を回し始めたら園児達で一列に並び順番に跳びます。他も良く睨けられていて感慨にひたった一日でした。

☆

早崎 泰江

冬初め雀に元氣貫ひけり

夏の物整理終らず冬木立

青空にけなげに向ふ冬薔薇

黄落や庭中黄葉に染りをり

温もりに魅せられて踏む落葉かな

一斉に朝日に向ふ石路の花

何事もなきこと祈る去年今年

手話

森 理和

指先に一途な思ひ月明り

門前に紅葉黄葉の大挙せり

ガタガタと小屋の兎は持て余す

烏猫伸びして振り向く十一月

もみぢせる葡萄の蔓の伸びつづく

さりげなく方便使ひ冬仕度

卓上にみかんのど飴住所録



裕子さん、ありがとう!!
紙ふうせんが遊ばれて、ほっとかれた様な空ろな日々を過ごしていた私に、息を吹き込んで下さいました。とても親しい友人が、乳癌と戦っています。帽子やカツラを用意して、放射線治療中です。私が癌の兄と向き合っている頃に、友人も宣告を受けていました。
十一月二日と十七日と、兄二人を送り、力が抜けました。体調も崩しかなりの間、ぼーうとしていました。
裕子さんの俳句や文章が、そんな私に“喝”を入れて下さいました。
実家の整理にも重たい腰を上げ、先ずは母の針箱を持ち帰りました。黒留袖と何点かの器をいただいたて仕舞いです。淡いピンクの爪木が咲いていました。

☆

吉成美代子

目覚めれば乗鞍岳の岩紅葉

傘立に傘立てかかり小春かな

鰯雲ぜんぶ写して高層ビル

銀杏葉をさけて歩きし下り坂

冬日さす墓石綺麗に並びゐる

試供品みな少しづつ使ふ冬

包み紙広げて伸ばす小春かな

☆

吉弘恭子

縄文の星を見つめむ去年今年

初明りただよふほしのうすあかり

歳旦やうさぎの居留守追いながら

ほろほろと初東雲の明けゆくも

初諷経たかくひくきと大鳥居

年始め猫のしっぽが土踏

うすうすと東の空に初鶉



東京スカイツリー 赤座典子

枯木立皆影絵とす落暉かな

熱爛にひっそり沈む牡蠣二つ

立田揚の河豚なかなか香ばしく

若者の綿入ズボン花模様

冬日和仕舞屋の間塔聳ゆ

天望ランチ日差に温む冬帽子

仰見る六三四の高さ灯し冴ゆ

☆

井上石動

替女歌のうらみ葛の葉紅葉かな

三つ峠むらさきだてる初冬かな

ジングルベール酔って帰還の父なりき

君の声すこしあたたかクリスマス

ねえねえと呼ぶ君のこゑ山に雪

太棹をくどく厚撥星冴ゆる

棧の上の時計の止まる霜夜かな

先日、吟行で東京タワーへ行っただけなのに、予約してあった東京スカイツリーに昇ってきた。

平日だというのに、当日券購入にもすごい人が並んでいた。

三五〇mの展望デッキへのエレベーターは、四季の景色が、墨田の工芸品で彩られている。往きの切子細工の夏の隅田川花火、帰りの冬の都鳥の空は、どちらも見事であった。

分速六百mという速さは、本当にあつという間に着き喚声が上がった。展望回廊へは、更にエレベーターに乗り、そこからスロープ状の順路を歩いて、四五〇m地点に着く。

その間、浅草、東京ドーム等誰にもわかる建物の間を、小さな家々が埋め尽くし、盛大なジオラマであった。御上りさんの冬晴の一日であった。

落つれば同じ

二月号の田中藤穂さんの「お祭」、そつそつ、そつだつたよなあ……の同感の気持ちで読んだ。

私の生家は、甲府の市立動物園公園の脇に在り、5月の連休には、当時県下随一の賑わいと言われる「正の木祭」が、ここで開かれる。我がご幼少の砌（つまりガキの頃）は、お神楽・植木苗木市・のど自慢大会・露天などなど百花繚乱。とくに「見世物」が幼なごころに、不思議で、おどろおどろしく……。見世物・蛇娘の『親の因果が子に報い……』『落つれば同じ谷川の水……』『ほれ、花ちゃんやっすい』のスピーカーのがなり声が、連日連夜聞こえて来る。

ある早朝、見世物小屋の前をうろつくとき、その蛇娘・花ちゃんが、赤い水玉模様ワンピースを着てバケツを下げて歩いていて、嬉しかった。そして、今、この「がなりスピーカー」が、句作の上で、どれほど役立っているか。

「落つ樁」などとは絶対作らない。「落つれば同じ谷川の水」により、「落つる樁」と、造作なく作れるのであります。

ありがとつ、見世物小屋の、がなりスピーカー。

秋田犬

大日向幸江

手袋のやうな靴下今朝の冬

家まるく仔猫まあるく冬に入る

石路の花古き良き唄流れくる

息荒く枯野を走る秋田犬

冬の川一筆書きの船の行く

べつとりと隠しごとのやう濡れ落葉

じんわりと保温クリーム枇杷の花



十二月作品より

長崎桂子・佐藤喜孝

老人が運動會で靴を脱ぐ

佐藤喜孝

地区の運動会なのか、それとも親子競争でしようか、此の頃の老人は男女ともお元気な方が多いしそれに履物を着けてない方が動きやすくお怪我も少ないでしょう、微笑ましい情景です。(桂子)

炒豆を買ひ来て釣瓶落しかな

大日向幸江

急に杖が必要になった友人が通り掛かりました。どうしたのこんなに暗くなってと言ったら、病院を出る時は明るかったのですが、でもすぐ暗くなるでしょうまだ五時なのに、それと足が動かないと嘆かれた。釣瓶落としだからと私。作者もお家を出る時は明るかったのですが、お買い

物をいっている間に、全速力で日はしずみました。

(桂子)

若医師の笑顔頼もし秋日和

斉藤裕子

希望と強い信念をお持ちになって、明るい日暮らしをなさして下さい。術後の不安と不自由の中で、医師はじめ其の病院の方々の笑顔に力付けられ事と思います。(桂子)

麻醉一瞬時覚醒秋夕刻

斉藤裕子

「麻醉一瞬」であつといふ間に麻醉で意識がなくなり「瞬時覚醒」で覚めた時の時間感覚が浦島太郎状態、「秋夕刻」でしっかりと時間感覚を取戻した、といふ句意、自分の大手術を客観的に詠める冷静さは生きることへの不断の研鑽が伺へる。(喜孝)

出稼ぎに行かうと思ふちんちろりん 定梶じょう
安らかな闇でありけりちんちろりん 長崎 桂子

松虫とちんちろりんは同じ虫をさすが、俳句
の中では違ふ働きをしてゐる。

松虫を聞いてをられし今は亡き 清崎敏郎

この句などはちんちろりんより松虫があふやうだ。
今月はたまたま “ちんちろりん” といふわた
しには珍しい季語で詠まれてゐる句が二句あつ
た。ちんちろりんは松虫の異名だがわたしは聴
いたことがない。you tubeでこの虫の声を知つ
た。両句とも♪ちんちろりん♪と松虫は無心に鳴
いてゐる。しかし句を読むものにはさびしくも
なつかしくも聞えてくる。

じょうさんと桂子さんはたびたび詠まれてゐ
る。ご兩人とも自然が豊かな環境のやうである。
わたしの回りでは枕元で鳴いてゐたつづれさせ

もいまは聞けなくなった。

ちんちろりん智慧の輪のもう解けさうでじょう
一生のあるいは不作ちんちろりん //

同窓の集ひ語らふちんちろりん 桂子
菜を刻むちんちろりんにながされ //

(喜孝)

鍵掛けぬ暮しありけり虫の秋 須賀敏子

長閑な田園風景が目前に広がって来ました。
そして鍵を掛けなくて暮せる日常に、私自身の
暮しと比べて、そんな穏やかな地方がまだ列島
に残っているのが嬉しく羨ましいです。(桂子)

朝寒し速歩の人に追ひ越さる 竹内弘子

運動不足に健康維持にと、あまり車の通らな
い道を選んで歩く方が私の地方でも増えて来ま
した。作者は追ひ越されて御気分は如何でした

でしょうか、私もたまに歩きますと、速歩の人
に出会います。「どうぞお先に」の此の頃の心境
です。(桂子)

夏落葉踏みて新芽のはや氣息 吉弘恭子

夏の異常な暑さは木木も影響を受けたので
しょう。今年は私の周辺でも夏の落葉が多かつ
たです。作者は、その後には新芽に新しい木の息
吹を見ました。鋭い観察眼です。(桂子)

いちじくや鍵をかけたる記憶無く 赤座典子

此の地方も大層恵まれた穏やかな土地柄のよ
うです。作者は鍵をかけた記憶が無いとおつ
しゃつていらつしゃいます。豊かな自然とお人
柄を賛美いたします。

広く澄み切った青空に浮かぶ白い雲、濃緑の
山並に日を受けて輝いている柿の色、壁画の様
に雄大な絵を連想しました。(桂子)

吉宗も浴びにいちやうもみぢかな 吉弘恭子

徳川八代將軍で米將軍様と言われた將軍様が
ご覧になられて落葉を浴びた古くて立派な銀杏
の大樹。機会があればぜひ見上げたいと思いま
す。(桂子)

ゆたんぼのかはりのやうな古寫眞 佐藤喜孝

古い写真を見ていたら、ゆたんぼの温かさで
全身を包まれたとおつしゃいます。多分幼き日
のお母様の暖かさが思い起こされて、うつとり
と暫く脳裏を駆け巡る時をお過しになられまし
たのでしよう。(桂子)

浮雲の懸る菩薩嶺柿の秋 井上石動

秋の雨遠くで人のうごきゐる 佐藤喜孝

秋の陽をぞんぶんに受け鯉の口 大日向幸江

銀杏を拾ふすべなし去りがたし 木村茂登子

麻酔一瞬間時覚醒秋夕刻 斉藤裕子

すがれ虫ひとり歩くをせかしをり 篠田純子

出稼ぎに行かうと思ふちんちろりん 定梶しよう

「お兄ちゃん」只呼んでみる秋の空 須賀敏子

蜜柑に爪あてし匂ひのとどく距離 竹内弘子

野良猫が部屋のぞきをり十三夜 田中藤穂

安らかな闇でありけりちんちろりん 長崎桂子

法師蝉終焉つげるかのごとし 早崎泰江

訃報受く郁子と木鋏左手に 森理和

城垣のところどころに萩の花 吉成美代子

間引菜の手に残りたる痛みかな 吉弘恭子

いちじくや鍵をかけたる記憶無く 赤座典子

もみつ葉を蹴って村営バス来り 井上石動

てふてふもうぐひすも連れ伊賦夜坂 佐藤喜孝

喜孝抄



自詠自読

秋惜しむ高いところが大好きで 定槿じょう

まだ差別語になっていないようなので、馬鹿ということばを違えますけれども、馬鹿と煙りは高いところ昇りたがる、という言いまわし、今でも遣われる。そこへ季語をくつつけただけ。それが掲句なのですが、「秋惜しむ」には少々思い入れがあります。私の隣りに在り。人家を一望できる高処に神社があり、私の散歩道の一つになっていますが、夏季初秋の頃は喬木の茂みによつて、そこから眼下を見おろすことができない。

蝉の季節には鳴き声にとり囲まれて、僻地にとり残されているような心持ちがします。小さなお宮さんですから境内もせまく、閉所恐怖症に襲われるよ

知らぬ子に手伝つてゐる数珠子採り 田中藤穂

ある日私は主人と二人で、飛鳥山とJR京浜東北線の線路との間の細い道を歩いてた。あまり通る人はない。右側の線路脇には雑草が生い茂つていて、道との間には金網の柵があるが、所々破れていて殆ど出入り自由だ。

少年が一人柵の中に入って何か採っている。十才位か。見ると少年の居るまわりに唐麦が生えていて、数珠子が生っている。それを採っているのだった。「あら、数珠子だ。」私はつい声に出して、側へ寄ると、幾つか採つて少年に渡した。少年はポケットに入れたり手に持ったりしていた。それから私と主人は、王子駅の方へゆっくり歩きながら、ふと見るとそこは唐麦が群生していて、数珠子が沢山生っているではないか。「あら、ここにこんなにあるじゃないの、

うな。やがて十月も下旬になって木々が葉っぱを落とし始めます。そのひまから足下の苧田が見えるようになって、いよいよ冬が来るんだな、と。落葉一枚一枚が観念せえ、といっているような。一茶の句へ山嵐や蕎麦の白さもぞつとするも、信州ほどではないがやはり雪国の此の地ではよく分かるのです。遣う土地、人によつてことばの陰影が違ってく。そんなことが説明を拒む俳句の詠み、読みを難しくしているのでしょう。詠み手と鑑賞するがわの意識を一致させよう、と思わぬ方が、あるいはいいのかも。

そう覚悟して鑑賞文は書くべき、と日頃思っているのですが。



あの子に教えてあげなくちゃ。」私は子供の時からどうもお節介な性格なのだ。私は小走りに戻つて「ねえ、あつちに一杯あるわよ。あつちにいらっしやい。」少年は少しびびくりしながら、大人しくついてきた。「ほら、ここにこんなに一杯。」

その時私はきつと十才の昔に返っていたのだ。下日暮里に岩崎さんという知合いの家があつて、父の仕事上お付き合いで親しかったのだが、時は昭和の始め、田舎のような広い土間があり、春には蓮を摘んできてお餅搗きをしたり、楽しい家だった。上品なおばあさまがいらして、その頃珍しいアイスクリームを作る道具があり、玉子と砂糖をまぜたものを中心の筒に入れ、そのまわりにブツカキ氷を入れ、ハンドルを手でぐるぐる廻してアイスクリームが出る。それをみんなで取り囲んで、見ながら待つ時が実に楽しかった。

さて、数珠玉だが、その家の裏庭に一杯生つていて、秋になるとその家の久美子ちゃんや卓也ちゃん

冬瓜のありしところに冬日差

吉弘恭子

と一杯摘んで耳飾をつくった。太い木綿針に糸を通してもらって、一粒づつ通して。そんな追憶が一気に蘇ってきて、私は少年より夢中で数珠子を摘んでいたみたいだ。「ほら、こん中に入れていらっしやい。」なんて、バックからビニールの袋を出して、少年には少し迷惑な変なおばさんだったかも知れない。

岩崎さんの家は空襲で焼けてしまった。あの少年も、もう立派な大人になったでしょう。私も、もうおばさんじゃなくて八十を越したおばあさんになった。主人も他界して十一年過ぎた。

あの日の記念にこの俳句が一つ残ったのが何よりの幸と感謝致します。



は相手がいなくて寂しいのじゃないかと私なりに勝手に考えお相伴から始まった。今もそれは続いている。あの時にお寿司は冷と思っていたがその後熱燗で食べたお寿司の美味しさに、なんだお寿司は熱燗でも冷やでもおいしいんだと。

冬瓜の熱いのも冷やしたのも美味しいと思った時に、ふと日本酒の熱燗と冷のことを思い出した。町内からそのお寿司屋さんがいなくなったら、とんと日本酒を飲む機会が少なくなった。

頂いた冬瓜はいつもすぐ料理したことがない。冬まで持つからと……。とうとう冬自分のことを主張してか冬の日の中に薄緑の色を主張している冬瓜を見て今日はあなたの出番よと！

家族みんなであたたかい夕食となった日であった。



冬瓜は自分で買ったことが主婦になってからは記憶にない。毎年主人の母の代から千葉の九十九里から行商にきてくださるおばさんに頂く。九月頃と十月に二回毎年続いている。料理法は挽肉と炊いた冬瓜をあんかけにして冷蔵庫で冷やして食べるのもいいが、あつあつのままもこれまたうまい。

熱いのも、冷たいものもいいと言うと日本酒がある。昔と言っても娘が小さい頃だったので三十五年くらい前になるかもしれない。同じ町内にお鮎屋さんがあった。町内のよしみで時々三人で食べに行っていた。この時に飲み物は？と聞かれた。カウンターに坐つての会話なので、主人に聞くこともなく日本酒で冷とこたえた。結婚前は会社で飲む機会以外は自宅でアルコールなどは呑んだことがない。結婚後

7ページより

さんの「私の母だったら無理にでも乗ってもらいます。」の一ト言であった。

日頃私を気遣って婦人会の仲間が寺内を移動する際誰かが私の手荷物を持ってくれ、階段などでは腕を組んでくれたりしている。

鶴見の駅からお寺の受付まで往路はタクシーでなくてはかなわず、エスカレーターの下りのタイミングがなかなかとれない最近の私の状態である。

歳を重ねるといふことは又身体に不具合を生ずることもある。しかし何の病でも発症時はショックを受けるが、だんだんその不具合にも慣れて折り合いをつける知恵も出てくるもので、それなりに日常を過ごしている。周囲の暖かい思いやりを有難く思っている。

万華鏡は一八一六年スコットランドで特許がとられてゐる。三年後には早くも日本で贋物が作られたとある。更紗眼鏡とも称したさうだ。興味があつたのであらう。明るい日差しに向けて覗くと別世界が現れる。

万華鏡を回すと雪華と紛ふ文様が色・形を尽して次々と変容してゆく。驚き感歎し時を過してゐるうちに、いつしかをさなき日の雪景色の中にある作者

に受賞してゐる。

ホームページの「俳誌のサロン」で瀧慶子様のお許しを得て瀧春一の全句集の再現をこつこつとやつてゐる。いままで『菜園』『常念』『瓦礫』『萱』『深林』と作つてきた。すべて書棚にはなかつたので石動さんと同じくネットの古本屋さんで求めた。『深林』から『花石榴』まで数年間開いてしまった。いま『花石榴』を載せてほつとしてゐる。墓参をすま

萬華鏡幼なき雪の日も見ゆる 瀧 春一 句集 花石榴

である。わたしも万華鏡を覗きたくなつた。調べてみると『万華鏡作家』といふプロもをられことを知つた。子供の頃学校で作つたものとは大分違ふのであらう。

この句は万華鏡を覗いてゐるうちに異次元の世界へと誘はれた。きつと楽しい雪の日の思ひ出であらう。明治三四年生れの春一、この作品は七一歳の作となる。この『花石榴』で瀧春一は蛇忽賞を一九八二年

すど心が晴れるが、それと同じ心境である。この勢いで今年は……と気負つてゐる。しかし年末に慶子様から喪中のはがきが届いた。「それからのあつといふ間や震災忌」がふと口をついて出てきた。

瀧春一先生からは「力まない俳句」「作る俳句」を教はり、高島茂先生からは「がんばる俳句」「書く俳句」を教はつたと勝手に思つてゐる。

み明しはみ仏のみに月見寺
蠅^{はばち}虎^こも居らねばわびしげに
家々をつなぎて露の石畳
花のごとき鯉の洗ひや一葉忌
貸本屋の本がなつかし一葉忌
冬の日の底に真鯉の深紫
浪の群ひむがしへ馳せ冬日出づ
前掛けに白鷹の銘大根引
寒雀頬の白さは汚れずに
花の寺其角歌麿の墓を訪ふ
行く春やバス停は蘆花恒春園
螢火の思ひ出横瀬夜雨の村
春愁やテレビドラマの三鬼に逢ふ
瓜揉みや引窓のある臺所
八月や時の流れもやや疲れ
敬老金もらひてひとりどぜう屋に

鈴虫や人に飼はれし声ならず
夜寒さや藁の匂ひの文庫本
山茶花に夕日となりてまた射せり
いのち延ぶることに必死や冬銀河
点滴の空き手に指しぬ冬筑波
手がふたつ小さくなりぬ雑煮椀
夕暮をたのしむといふ賀状かな
大病の後もせつかち春寒き
はなやぎて二月の雨の枯柏
金貨のやうなつり銭が出る花曇
眼の玉を種のごとに螢鳥賊
昔話ばかりしてゐて野蒜つむ
猫も亦黴ざらんとて身を拭ける
きな臭きほどの日当り大根干す
大いなる団地の端^{はし}の枯野駅

『花石榴』より

東京タワー① 篠田純子

いちやう黄葉すつくと東京タワーかな

都バスで飛ばすぜえなんぞと紅葉狩

雪の富士少し離れて雲の湧く

屹立のビル手の内に冬もみぢ

冬の汗ルックダウンウインドウ

雪富士はるかしばし空中浮遊せり

常陸秋蕎麦ちよつと甘めのそばつゆで

けやき紅葉東京タワーの股ぐらに

冬ぬくしバス待つ合ひ閤体操す

東京タワー② 佐藤喜孝

紅葉越えビル越え東京タワーの影

一滴も吞まずに出でし走り蕎麥

枯芝に錆こぼしたる太鎖

冬日和東京タワー寝かせたし

雪の富士東京タワーに氣功師來る

冬の雲あまたゆかしめ塔ひと日

冬鴉東京タワーに止りけり

十二月ビルの上には草が生え

冬の海冬の日影に消え失せし

江戸の坂櫛落葉のいましきり

白富士や太郎の塔に次郎の塔



別冊 特別付録
『俳句ダイアリー 春』

月刊 俳句界 2014年 2月号

定価 1000円(税込)

特集 俳人の小説

高濱虚子、石塚友二、清水基吉の小説を読む

●総論 坂口昌弘

●俳人の書いた小説(あらすじと解説)

高濱虚子「柿二つ」「虹」…今井肖子

石塚友二「松風」…江口千樹

清水基吉「雁立」…山崎房子

ほか、石川桂郎など

グラビア 俳句界NOW 山尾玉藻

作品 たむらちせい 丸山風人 津川絵理子

《シリーズ 結社の未来を考える④》

関西結社主宰座談会

池田琴線女 佐久間慧子

高橋将夫 山田佳乃 姜 琪東

おとなのエッセイ 眉村卓他

＊セレクション結社「槐」高橋将夫

私の一冊 今瀬剛一「対岸」

魅惑の俳人 成田千空 *インタビュー 奈良文夫



対談 佐藤しのぶ (オペラ歌手)

佐藤しのぶ (オペラ歌手)

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文學の森

お求めは… ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

あとがき

明けましておめでとございませう。本年も「あを」をよろしく願います。

原稿募集

あをは常時「特作」「随筆」をお待ちしています。会員で作る「あを」です。遠慮無くご投稿ください。(喜孝)

◎厚志御礼申し上げます。

大山夏子 様 森 理和 様

二〇一四年一月号

発行日 一月一三日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/恩田秋夫・松村美智子

郵便振替 00130・6・55526 (あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝

表紙・佐藤喜孝